

2019 年度第 4 回

vol.256 物学研究会レポート

本と人をつなぐ — 新しい本の差し出し方

幅 允孝 氏

有限会社 BACH 代表・ブックディレクター

2019 年 7 月 22 日

物学研究会
BUTSUGAKU Research Institute

第4回 物学研究会レポート

2019年7月22日

最近、「本」を取り巻く状況は激変しています。本を読まない人の増加、Amazonに代表されるインターネット通販の拡大と書店の減少、電子出版の普及など、本との出会いの場も多様化しています。そのような逆風のなか、幅さんは「本」の魅力を再考し、本を媒介とした多様な「出会い＝つながり」の仕掛けや仕組みをデザインされています。

今回は、幅さんの活動を通して、本とのつながり方、本のある場所との出会い、そしてデザイナーにお勧めの本などを教えてもらいながら、本を巡る小旅行にでかけましょう。

以下、サマリーです。

本と人をつなぐ — 新しい本の差し出し方

講師

幅 允孝 氏

有限会社 BACH 代表・ブックディレクター



幅 允孝 氏

書店から人が消えた

幅：僕は、図書館や書店をつくったり、本を編集したりする仕事をしています。今は検索型の世の中になり、人は知っている本しか手に取らなくなりました。それで、知らない本を手にする機会を広めたいと思い、今の仕事を始めました。今日は、本のような届きにくいものを、どのように届けるか、というコミュニケーションに関する話としてお付き合いいただければと思います。

僕は、2002年まで青山ブックセンターの六本木本店に勤めていました。建築やデザイン書の担当をしていたので、みなさんの中には、エプロンをして働

く僕の姿を見かけたことがある人もいるかもしれません。その頃、出版業界に大きな事件が起こりました。それは、2000年に上陸したAmazon.co.jpです。当時は、まだダイヤルアップという脆弱な回線だったので、僕はそれほど驚異だとは思っていませんでした。けれども、回線の高速化、拡大化とともにどんどんインターネットで本を買う人が増え、毎日見ている売上の数字は、どんどん前月、前年の数字を割っていきました。

本の売り上げが下がることよりも、もっとストレスになったのは、来店客数が減ったことでした。本は、著者以外の誰かがそれを開くことで、初めて本

たりうると僕は思っています。たとえ立ち読みでも、手にとってパラパラと本をめくことで、誰かの言霊が他者にさらされ、その小さな熱が蓄積して書店をうずまき、文化というものをもりたてていくのだと思っているからです。そして、本を手取る人が少なくなると、どんどん書店の現場が冷たくなっていく。そのことを実感しました。

本が売れないのに新刊はなぜ増える？

本の販売部数は、1996年を頂点にどんどん下がって、今では最盛期の7割程度になっています。けれども、新刊の発行点数はどんどん増えていて、1日に平均二百数十冊もの本が出版されているので、たとえプロでもこれらすべての本をキャッチアップすることは到底できません。なぜそんなことが起きているのか。まず、出版社が取次と呼ばれるディストリビューターに本を卸すと、卸した分だけお金が入って来ます。けれども、何ヵ月か後には返品が出るので、返金しなければいけなくなる。返金するお金はないので、その分多くの本を卸して差額で相殺しようという、自転車操業の極みのようなことをする出版社が多くなり、内容の濃度よりも数を優先させるようになってしまったんです。

さらに、リプリントするよりも新刊のほうがまとまった冊数を卸せるので、一時的に稼げる金額が多くなります。それで、本は売れないのにタイトル数だけはどんどん増えていくようになったのです。また、雑誌と本が同じ流通システムで運ばれていることも原因の一つです。本来、書籍は雑誌のような即効性のメディアではなく遅効性のメディアなのですが、日本の出版産業を支えていたのは雑誌なので、同じトラックで運ぶために雑誌の発行ペースに書籍を合わせるようになったのです。

おせっかいではなく結節点をつくる

このような状況のなか、僕は本を交通整理することによって、人と本にもう一度いい出会いをもたらしたいと考えるようになりました。そして、「人が本屋さんに来ないのであれば、人がいる場所に本を持

っていくしかない」という思いでこの仕事を始めました。

では、それをどうやって届けてきたかということについてお話しします。まず、自分が読んでおもしろかったものを誰かにおすすめしたい、というのが基本なのですが、残念ながら自分がいいと思っても、ほかの人はなかなか同じようには思ってくれないので、おせっかいになってしまうことも少なくありません。

親切とおせっかいの境界を知るためには、本を届けたい相手が両手を伸ばして届く範囲内に何が入っているのか、その人たちの声を聞きながら選書していくことが大切です。

以前、九州大学にあったユーザーサイエンス機構という組織と一緒に、絵本カーニバルというイベントを行ったとき、小学校の中学年から高学年までの数十人の子どもたちに、児童文学を勧める機会をいただきました。僕が用意したのは、ステイーブンソンの『宝島』です。そのおもしろさを熱く語って聞かせたのですが、子どもたちはつまらなそうにしました。僕の好きは、彼らにとってはおせっかいにしかなくなっていたのです。そこで、ほかの海賊の話題に転換することにしました。子どもたちが好きな海賊の話といえば、尾田栄一郎の『ONE PIECE』という漫画作品です。実は、『ONE PIECE』も『宝島』も、両方とも史実に基づいているので、どちらの作品にも、海賊史に名を残すような人物が登場しているんです。たとえば、『宝島』に出てくるジョン・シルバーという海賊は、片足のコックなのですが、『ONE PIECE』にもよく似たゼフという人物が登場します。こうした共通項を挙げながら、関係性をあらわにしてあげると、子どもたちは喜んで聞いてくれるんです。

このとき、彼らが両手を伸ばした範囲の中には『ONE PIECE』しかなくて、僕が届けたいものはその外側にありました。それを届けるには、関係なかったもの同士が関係性をもつ「結び目」「結節点」をつくることが重要だったのです。これを本棚づくりに当てはめると「関係のなかったものが関係を結ぶ＝編集型の本棚をつくる」ということになります。では、その実例を紹介します。

トヨタ博物館 「CARS & BOOKS」

これは、僕たちがつくらせてもらっている、トヨタ博物館にある図書コーナー「CARS & BOOKS」で、博物館を見終わった後、余韻にひたりながらコーヒーと車の本を楽しんでもらうブックカフェです。ここで編集型本棚の例として紹介するのは、『Rolls Royce Motor Cars』という、ロールスロイスをつくっている職人たちの姿を撮った写真集と、その横に置いた『ちびまる子ちゃんーわたしの好きな歌』という漫画です。これを見た人は、なぜこの2冊が隣り合わせに置いてあるのだろう、と不思議に思って漫画を手に取ります。そして、付箋のついたページをめくると、まるちゃんがロールスロイスに乗っているシーンが出てくるんです。

実は、トヨタ博物館は、男の子とお父さんはとても喜ぶのですが、女の子とお母さんはだんだん飽きてしまうという弱点があります。それで、女の子に親和性のある本を置きたいと思ったわけです。もし、これが通常の方法で分類している本屋さんだったら、ロールスロイスの本は写真集のコーナーか産業のコーナー、ちびまる子ちゃんは漫画のコーナーか女性エッセイのコーナーに置かれて、この2冊が隣り合うことはありません。

今は、検索型の世の中なので、自分が知っている本しか手に取らないし、自分の好奇心を意識的に広げていこうと思う人はそれほどいません。それを少しでも、自由に楽しく拡大していくために、僕たちはこうした編集型の本棚をつくっています。

神戸市立神戸アイセンター

次は、具体的にどんな選書をしているのかというお話したいと思います。一つ目は、神戸市立神戸アイセンターという眼科の最先端医療を行う病院です。病院の玄関に入ると「ビジョンパーク」というラウンジがあって、ここにライブラリーが設けられています。

ビジョンパークは、目が不自由な人も多く利用するにもかかわらず、通路は迷路のようにジグザグになっていて、段差があるのに手すりはありません。これは「世の中全体が100%バリアフリーになることではないので、社会で待ち受けている危険なことを

安全に体験できる場所があったほうがいいのではないか」という院長のアイデアによってつくられました。

こうした新しい試みがなされている場所で、僕たちはライブラリーをつくることになったのですが、視覚障害者に向けて、どのような本を手に入れればいいのかわからないので、インターネットで調べて基本図書を取り寄せて読み込み、それでもわからない部分は、患者さんの前で実際に本を並べて紹介しながら、インタビューワークをしていきました。そこでわかったのは、全盲の方と弱視の方では必要としている本が全く違うということです。

たとえば、全盲の方向けの音声図書には、機械の声と肉声の2種類があって、肉声のほうが明らかに聞きやすいので、そちらを入れようということになりました。逆に、音声図書が発達しすぎたために、点字ができない視覚障害をもつ子どもが増えたという問題もあるということで、点字の本をさらに追加で入れることしました。

もう一つおもしろかったのは、香料印刷を使った『おともだちカレー』という絵本で、最後のカレーができた場面のページを指でこすると、カレーの匂いがするんですね。これを全盲の子どもたちに読んであげながらこすると、急に嗅覚が刺激されるので大声を上げてびっくりするんです。

そして、全盲の方向けの選書を考えるうえで、とても大事な一冊となったのが『でんしゃはうたう』という絵本です。内容は、車窓からの眺めを描いた絵と、いろいろな場所を通るときの電車の音を「たたっ、つつつつつ どどん」など、多彩な擬音語で表現した絵本で、文章は三宮麻由子さんという全盲の方が書かれています。この本を読んだときに、細やかに音を聞き分け、それを言葉で表現するという、健常者にはない能力を実感して、谷川俊太郎さんのオノマトペの本や、音をセンシティブに捉える詩人の本なども入れることにしました。

一方、弱視の方は、もともと視力があつただけれども、だんだん見えなくなった、という年齢の高い人が多いんですね。テキストを読むのは辛いので、コントラストがはっきりしたカラーの写真などがいいということがわかりました。なかでも一番受けがよかったのが篠山紀信さんの『アイドル 1970-

2000』という各時代のアイコンとなる俳優や歌手などの写真を集めた作品集で、たとえば男性に山口百恵が水着で寝ていますよ、と言うとページに顔を近づけて、必死に見ようとするんですね。そんなことを繰り返しているうちに、弱視の方は「何が見える」ではなく「何が見たいか」ということを考えて選書すべきなのではないか、ということにたどり着いたわけです。

さらに、阪神タイガースが85年に優勝したときの写真や、甲子園の名場面、震災前の神戸の風景が見たいという意見など、やはり磁場というものが重要だと改めて思いました。

札幌市図書・情報館

札幌市図書・情報館は、昨年10月にオープンした札幌市図書館の分館で、僕たちは立ち上げのお手伝いをさせていただきました。蔵書数は4万5千冊で、公共図書館としてはかなり小さいのですが、その代わりに「働いている人のための図書館」というかたちで役割を明快にして、夜遅めの時間まで開館したり、席をネット予約できるようにしたりしました。一番の特徴は、本のセグメントの仕方です。たとえば、「人間関係」という大テーマをつくって、その中に「ジェンダー」という中テーマを設ける。さらに「すべての人権を守れ!」という小テーマのところに、職場におけるLGBTQの考え方に関する本などを並べています。大事にしているのは、一つのクエスチョンを解決するのに、どこの棚に行けばいいのかを明快に示して、さらにそのアイデアが多様に並んでいる、という状態をつくることです。

本は、一冊だとただの本ですが、それを並べることによって独特のアトモスフィアというものが生まれます。その特性を生かして一冊一冊を関連づけ、それを手にとってもらえるような工夫をしています。

JAPAN HOUSE LONDON

JAPAN HOUSEは、ロンドン、サンパウロ、ロサンゼルスに開館した日本文化を紹介する外務省の施設です。僕たちはその3施設のライブラリ

一のキュレーションをやらせていただいているのですが、その中のロンドンのライブラリーをご紹介します。ここはライブラリーというより、ギャラリーに近いかたちになっていて、4ヵ月に1回内容を入れ替えています。これは「Japan & Nature」というテーマで、写真家・鈴木理索さんから春夏秋冬の作品をお借りして、その下に本を並べました。たとえば、「春」の写真の下には桜のコーナーをつくり、大森克己さんが撮った桜、蛭川実花さんが撮った桜、『桜の森の満開の下』という小説作品などを並べ、日本にとっての桜は単にきれいなものではなく、死や狂気を連想させるようなものでもあることを紹介しています。

もう一つは今年の5月から始まった、漫画におけるジェンダーの多様性をテーマにした

「LGBT+:Diversity in Manga」という本棚のエキシビションです。ちょうど今、大英博物館で漫画展をやっているのです、それに合わせてJAPAN HOUSEでも漫画を取り上げることになりました。また同時期に「Pride in London」というLGBTQのパレードが開催されるということで、ジェンダーと漫画をテーマにしようということになりました。

これは異性装に関する本として『リボンの騎士』や『ベルサイユのばら』『海月姫』を並べたコーナーです。また、ジェンダーを語る上で欠かせない、萩尾望都、大島弓子、山岸涼子、竹宮恵子の作品も並べています。そのなかでも、重要だと言われているのが竹宮恵子の『風と木の詩』で、その横にはこのストーリーを考えるうえでインスパイアされたという、稲垣足穂の『少年愛の美学』と、ヘルマン・ヘッセの『デミアン』を隣に並べています。ほかにも、『やがて君になる』というレズビアンものや、同性婚をテーマにした『弟の夫』など、最近の作品も入れながら、いろいろな世代のいろいろな人に読んでいただきたいと思うものを集めました。

城崎温泉発の限定本が大ヒット

城崎温泉といえば冬の松葉ガニですが、かつては文学も有名で、『城の崎にて』を書いた志賀直哉や、同じ白樺派の有島武郎や武者小路実篤など、多くの文人に親しまれたことから、町内にはたくさんの文

学碑があります。観光ポスターにも「歴史と出湯と文学の街」と書いてあるのですが、残念ながら文学が盛り上がっていないので、何かできないかというお話をいただきました。

そこで、現代の作家に逗留してもらい、城崎温泉を舞台にした作品を書いてもらうのはどうかということで、その第1弾を小説家の万城目学さんにお願いすることになりました。万城目さんは、その地域の磁場を物語の中に組み込むのがとても上手な作家で、以前は雑誌のインタビューで、影響を受けた1冊として志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』を挙げていたこともあったのです。

そして、志賀が泊まっていた三木屋旅館に何回か滞在して、『城崎裁判』という作品を書き下ろしてもらいました。内容は、スランプに陥った作家が城崎温泉を訪れると、『城の崎にて』の主人公が死なせてしまったイモリの子孫が現れ、先祖のイモリを殺した罪を問う裁判に巻き込まれるというものです。これを旅館組合の若手経営者たちが立ち上げた「本と温泉」というNPO法人で出版しました。あくまで城崎にきてもらうためのプロジェクトなので、インターネット販売は一切せず、販売は町内の旅館や土産物店など現地でしか買えないようにしました。その代わり温泉に浸かって読めるよう、表紙はタオル地、中は防水の紙でつくりました。これがSNSを中心に話題になり爆発的に売れたんです。

次につくったのが、湊かなえさんに書いてもらった『城崎へかえる』です。湊かなえさんは、淡路島に住んでいらっしゃるのですが、毎年年末はご家族で城崎温泉に蟹を食べにいらして、そのときに『城崎裁判』を見つけて読んだらおもしろかったと。そのことを万城目さんにメールか何かで連絡されたそうで、最後に「私のほうが城崎にはよく行っているはずなのに」というひと言が書かれていたのだそうです。それを万城目さんからお聞きして、これはチャンスだと思い、第2弾は湊さんをお願いすることになりました。

内容は、城崎温泉に行った母と娘がとにかく蟹を食べまくるというストーリーなので、本の装丁もテクスチャー印刷によって蟹の殻のゴツゴツ感を再現し、ゆで蟹を押し出してスポッと取るようなパッケージにしたところ、一昨年の造本装幀コンクールで審査員奨励賞をいただきました。

そして、元祖に対するリスペクトも必要なので、第0弾として『注釈・城の崎にて』という本をつくりました。これは志賀直哉の『城の崎にて』と、当時の様子がわかりやすいように解説した注釈版を二冊組にしたものです。値段は、『注釈・城の崎にて』は1000円(9000部)、『城崎にかえる』が1200円(17000部)、『城崎裁判』が1700円(17000部)なのですが、結構売れているんです。また、文学から領域を広げて絵本をつくってみようということで、年内にtupera tupera(ツペラツペラ)さんという絵本作家の方と絵本を出す予定です。

新たに動き始めた城崎文学

これらの本は、1冊あたりの原価は高いものの、制作費以外の費用がほとんどかからないので、ぼちぼち儲かっています。本の在庫は、三木屋旅館の使っていない宴会場に置かせてもらっているので倉庫代もかからないし、なくなれば自転車ですぐに運べるので運送費もかかりません。そして、ここでしか買えないという点もうまくいきました。

最初にお土産屋さんに置いてもらったときは、この雑巾みたいなものは何だとか、マンジョウメガク(※万城目学)って誰だ、という感じだったんです。それがSNSを中心に少しバズったおかげで、1週間ほどで売れてしまった。それで、もう1回、またもう1回と納品していくうちに「マキメマナブ」と読めるようになってくれていて、さらに5回目に納品したときには1冊買って読んだと言われました。

販売店に落ちるのは1冊あたり400円弱とささやかな額ですが、実際にお金が入ることで「手前ごと」になります。すると、止まっていた文学という時計の針が少しずつ動き始めていくんですね。

本を取り巻く環境を整える

本をつくって得られた収益は、本を取り巻く環境を整えることに活かしています。その一つが「城崎文芸館」のリニューアルです。1998年に設立した

「城崎文芸館」は、展示の内容が20年間変わらないという、ハコモノ行政の極みのようなものだったので、新たに城崎の文学が動き始めたのを機に、その企画展をやろうということになりました。

第1回の企画展「万城目学と城崎温泉」では、本の見せ方にこだわろうということで、人感センサを使って、人が近づいていくと『城崎裁判』の冒頭の文章が出てくる、という文字が動的に訴えかけるようなものをつくりました。

第2回は「湊かなえと城崎温泉」。このときは、湊かなえさんに百問百答をお願いして、それぞれの答えを手書きで書いてもらいました。湊さんは、イヤミスの女王と呼ばれていますが、とてもいいキャラクターなので、そんな彼女の人柄を出せればと思いました。

第3回は「文学と演劇と城崎温泉」というテーマで、城崎国際アートセンターで制作される舞台『日本文学盛衰史』（原作：高橋源一郎）について、芸術監督の平田オリザさんが原作からどのように演劇にするのか、文学が演劇になる瞬間のようなものをエキシビションで示しました。

紙の本だから心に深く刺さる

今、世の中はデジタルのテキストがたくさん増えています。紙のテキストがデジタルのテキストと一番違うのは、印刷された後は書き直しができないということです。書き直しができないので、よく推敲し、何度も読み返すから、精度も強度も高まる。そして、精度・強度の高い情報は、読んだ人の中に深く刺さりやすい。

今後、シンギュラリティの時代を迎え、AIがいろいろなことをやっていくなか、人間にとってとても重要なのは、自分の中に深く刺さって抜けない何かをどれだけもっていられるかだと思うのです。そういうものを提供するために、紙の本やそこに定着している言霊がやれることは、まだまだある気がしています。ただ、それを静かに待っていてもアクセスしてもらえないので、手を変え品を変えながら書き手の言霊を伝えたい。そして、それが読んだ人の人生のどこかを駆動させるようなものでありたいと思って、この仕事をしています。本日は、ありがとうございました。

Q&A

Q1: 電子出版に関してはどういう評価をされていますか？

幅: 僕は、紙の本と電子書籍は使い分けています。たとえば、最初に漫画作品を読むときは電子が多いです。そして、これはもう1回読むなと思ったら、紙で買い直します。今の時代は、たくさんある情報の中から、自分と必要な情報とをつなぐ結び目を、きちんと手元で確認できるように置いておくことがとても大事だと思うんです。そういうときには、リアルな紙のほうが強いなという気がしています。

一方で、デジタルはたくさん読むという意味ではいいと思います。けれども今は、量を読むよりも、何度も読み重ねてどれだけ血肉化していくのかというほうが大事なような気がしているんですね。そういったことは、やはり紙の本がいいかなと個人的には思っています。

逆に病院では、デジタルをすごくよく使わせていただいています。やはりテキストのサイズが自由に買えられることや、ページをめくりやすいというのは利点です。紙の本を持ってめくるということは、意外とフィジカル面での負荷がかかるので、そういうときにデジタルは有用だと思います。

Q2: 公共図書館の本は、背表紙に貼ってあるラベルシールが台無しにしているなど思うのですが、あのデザインを変えて新しいものにすることはできないのでしょうか。

幅: その通りだと思います。タイトルが長い本の場合、下のほうがラベルで隠れてしまうので、プライベートなライブラリーは絶対つけないのですが、公共図書館はセンサーで本の情報を読み取るときに、昔ながらの定形しか読み込まないようなシステムになっているので、残念ながらつけざるを得ないんです。

Q3: ご自身が読みたい本は、どのように探し出しているのでしょうか。

幅：自分が仕事で関わっていない本屋さんに行って探します。なるべく荷物を軽くしてトイレを済ませ、腹は6分目くらいにして、ハンティングに近いような状態で探すと見つかります。そして、迷ったら買います。世の中、失敗したくない病が蔓延しているので、本くらいは自分で好きなように読めばいい。自分の野性みたいなものを発揮できる唯一残された少ない場所が本屋さんで本を選ぶということだと思っています。

Q3：本はどんどん増える一方だと思いますが、どのように整理されるのでしょうか？

幅：引越します（笑）。読書は食事に近い感覚で、お肉を食べたい日もあれば、野菜と冷奴で済ませたい日もあります。なので、そのときストレスにならないものを手に取って読むのですが、絶対進まないものもあります。そういう本はまだ読むタイミングではないということで、トイレの「まだの棚」と読んでいる棚に置いています。あるとき読んでみると急に進むこともあるので、売ったり、あげたり、捨てたりすることはしません。ですから、事務所と家はとんでもないことになっています。

関：幅さん、みなさん、ありがとうございました。

以上。

2019 年度 第 4 回物学研究会レポート

幅 允孝 氏

有限会社 BACH 代表・ブックディレクター

写真・図版提供

物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2019 BUTSUGAKU Research Institute.